

# 「比べる」ことでせまる音楽の魅力

～比べる視点を与えることで思いや意図をもって表現する子どもを育てる～

田辺 麻衣子

思いや意図をもって表現するための手立てとして「比べる」ことが有効ではないかと考えた。レディネスの差が大きい和音の学習で「比べる」活動を自然に組み込み、どの子どもも負担に感じることなく和音について学べるようにした。お気に入りの和音を見つける活動から、できた和音を比べたり、本来学習する和音に興味をもったりすることができるようになった。また、自然とどの子どもも「次はドミソをひくよ。」「今度はレソシをひいてみてよ。」など言いながら和音を演奏することができた。しかし、あるグループが考えた和音や和音の響きの変化について他のグループがよいところや改善点を話し合うところまで至らなかった。聴いている子どもたちが演奏しているグループの思いや意図を表現から感じ取れるようにしていくことが今後の課題である。

キーワード：比べる、思いや意図、和音、小グループ（男女混合4人）での学び

## 1. 「思いや意図」とは

学習指導要領に示された「思いや意図」。思いや意図をもって歌い・演奏し・つくる。今までも大事とされてきたことが今回はっきりと記載された。しかし、「思いや意図をもつこと」と「思いや意図をもって表現すること」は違う。まず、①思いや意図をもつことができるように、そして②それを表現できるように、二段構えで学びをつくっていくことが必要だと考えた。

○思いや意図をもつためには

- ・同じ曲を何度も聴くことに加えて、違う演奏形態のものや違うアレンジのものなども聴き比べ、様々なことに気付き、感じられるようにする。
- ・様々な活動の中で音符、休符、記号や音楽にかかわる用語をどの子ども理解できるようにしていくことで、作曲者の思いや意図を考えるようにする。

○思いや意図を表現するためには

- ・自分の表現を録音して確かめたり、工夫したり、聴き比べられるようにする。
- ・同じ曲で正反対の思いや意図（例：明るい・暗い）を表現して比べることで具体的な表現技能を身に付けていく。
- ・朝の会で毎日音楽を表現する時間を確保する。

ここで重要になるのが「比べる」ことである。ただ何となく聴く・表現するのではなく、比べる視点を与えることが音楽の魅力にせまるポイントである。この人はこんな思いでこの曲を作ったのか、演奏しているのか、また違う人が演奏したらこんな風に曲の雰囲気かわるのか・・・など1つの曲の背景や表現の仕方の違いを感じることで、「自分だったらこんな風に表現してみたい。」という思いをもつことができるようになるのではないかと。また、「こんな表現の仕方もあるのか。」と気付いたり、「ぼくはこう表現したいのだけ

ど、実際に自分の表現を聴くとできていないな。」と確かめて改善したりする中から思いや意図を表現する技能を身に付けていくことができると考えた。しかし、思いや意図をもつことができたとしても、一人では表現しきれない場合がある。そこで、友だちが表現したい思いや意図を加えたり、それぞれの思いや意図を組み合わせたことで、「みんなで表現したら、こんなこともできるのか。」と音楽のよさを感じ、音楽が楽しいと思う子どもを育てられるのではないかと考える。

また、このような活動を積み重ねることで、新たな思いや意図が子どもたちの中から生まれ、「次はこうしてみよう。今までとどんなところがかわるかな。」など自分たちの表現の違いにも目を向けられるようになり、お互いを高め合おうとするのではないかと考える。

## 2. 「比べる」視点を与えることで

比べる視点を与えることを中心におき、思いや意図をもって表現できるように、実践を進めた。

- ①どのような表現をしたいのか個人やグループで考えたことを言葉と楽譜に記録し、思いや意図をもつことができているか実践する。
- ②どの場面で比べる活動を取り入れることが効果的であるのかを実践する。
- ③小グループでの学習を行うことでどのような学びの質の高まりが見られるのかを検証する。

## 3. 授業の実際

ここでは、題材「重なり合う音の美しさを味わおう」～『静かにねむれ』～について報告する。

### 3. 1. 「和音作り」より

本来、教科書では与えられた和音を用いて伴奏の仕方を工夫し、和音の響きや響きの変化を感じ取

ったり、その響きを味わって演奏したりすることがねらいとして挙げられている。しかし、和音は、1本の指だけでなく同時に3本の指を使うこと、また、どの鍵盤を使えばいいのかわからないことなどが原因となって子どもたちから敬遠されがちである。和音がわからない子どもにとって「なぜドミソでなければならないのか。」は大きな問題となる。初めからI・IV・V・V<sub>7</sub>を教えていくのではなく、自分で和音を作る活動を行うことで音へのこだわりが生まれてくると考えた。

どの子どもも抵抗なく和音を作ることができるよう

- ①シ～レの白鍵だけ
- ②3つの音を選ぶ
- ③3つを選ぶとき同じ音は使わない

という3つのルールだけで行った。(図1・2)



図1. 和音作りの様子

和音を作ろう (4) 拍 ( )

上田君 自分 田中君 上木さん

レファラ フレ フラド ソドミ

ドレミ ミラシ アソラ フドソ

レミファ メラド ファレ ソシレ

ランド ソラレ ドファソ フドミ

ドレソ ミソド ファシ ミソド

ドミラ ファソド ドファソ ソシミ

図2. 作った和音の例

次に、作った和音の中からお気に入りの和音を見つける活動を行った。ここでは、グループで1つを決めるのではなく、1人1人が和音を演奏する中でお気に入りを見つけるようにした。このときにも知らず知らずのうちに子どもたちはたくさんの和音を演奏することとなった。どの子どもも和音の演奏に慣れてくるのである。また、なぜ、その和音が気に入ったのかも記

録した。(図3)

お気に入りの和音はこれ!!

お気に入りの理由  
音があって3つから  
曲がおもしろい  
どつたいたろ

お気に入りの和音はこれ!!

お気に入りの理由  
ドレミはネの心者  
でもかたんたんに  
つけるから

図3. お気に入りの和音の例

### 3. 2. 『静かにねむれ』より

フォスターがつけた和音で演奏するのではなく、ここでもオリジナルの和音を使うようにした。『静かにねむれ』に作った和音をつけていくのである。和音をつけるときのよりどころとして、前もって「どんな静かにねむれにしたいのか」グループで決めておいた。また、キーボードで表現していたので音色も決めておくようにした。(図4・表1)



図4. 和音をつける様子

班	作りたい『静かにねむれ』	音色
1	楽しそうだけどすやすや眠れるように	ストリングス
2	静かな夜みみたいな静かなメロディーに (音量も小さく)	ピブラフォン
3	さびしい子守歌のように	フルート
4	静かに眠れる優しい感じ	フルート
5	暗く悲しく「思い出すあのえがお」だけ明るく	シンセ1
6	ゆっくりやわらかく	グロッケン
7	明るいとこりと暗いところがあるように	バイオリン ストリングス
8	やわらかく	シンセ3
9	歌いやすいように弱く	ピアノ
10	明るく、最後がゆっくり	クラリネット

表1. 各班の表現したい『静かにねむれ』

いろいろな和音の響きの違いを感じ取りながら旋律に合うようにつけていくことで、和音を身近に感じ、和音を使って演奏することを楽しめるようになっていった。しかし、中には「もうちょっとやのに、どうしても合う和音が見つからない。」と苦戦しているグループもいた。さらに、「1つ1つ聴いたらきれいなのに、最初にこの和音をひいて続けて次の和音をひいたら、何か合わない。」と和音の響きの変化に気付きかけたグループも出てきた。それぞれのグループでこだわりをもって和音をつけることができていた。

また、グループで考えた和音の発表も行った。やはりドミソから始めるグループが半数いた。聴く子どもは他のグループがどんな和音を使っているのか興味をもっていたので、鍵盤を実物投影機で映し視覚的にもわかるようにした。(図5)



図5. 発表の様子

最後にフォスターの『静かにねむれ』を聴いた。和音の響きや使っている和音がよくわかるようにトーンチャイムを用いた。それぞれの1音1音の重なりがよくわかるように教室の3カ所にわかれて音を鳴らすようにした。「同じ音ばかり使っている。」「きれいな和音や。」などフォスターが使った和音の響きのよさに気付くことができていた。

しかし、耳だけではどの和音を使っているかわからない子どもがほとんどなので教科書で確かめることにした。フォスターがどの和音を使っているかどの子ども真剣に楽譜を見ていた。また、「フォスターはドミソ・ドファラ・シファソ・シレソを使っている。」と自然に楽譜を読み、和音を口にする子どもが現れた。(図7)



図6. 子どもたちの様子

#### 4. 授業の考察

この題材をすすめるにあたり、どのようにして「和音」に興味をもたせるかが一番の課題であった。どの子ども主体的に学んでほしいという願いから和音を作る活動を行った。和音を全く知らない子どもでも「今度はミから始まる和音を作ってみよう。」「これやったらいっぱい和音作れるな。」など楽しんで活動する様子が見られた。

しかし、子どもたちが作った和音は様々であったので、和音の分類が必要だったと考える。視覚的な場所の覚えやすさやなどから「お気に入りの和音」に不協和音を選んでいたり、誰も見つけることができなかった和音だからと音の重なりとは別のところにこだわりをもって「お気に入りの和音」を選んだりする子どももいた。和音の分類があれば、それぞれの音が出す響きについてもっと深く対話することができたのではないかと考える。例えば、「隣同士3つの音が並ぶとあまりきれいにきこえないね。」や「1つとばしに作るとどの和音もきれいにきこえるね。」などである。

実際に1人1人が選んだお気に入りの和音を見るとクラスの半数強の子どもがハ長調に關係のある和音を選んでいて、このことを活かして和音の分類をすれば、本来教科書で学習するハ長調の和音やI度やIV度などの関係にもすんなりと近づくことができたかもしれない。(表2)

ドミソ	10人
ソシレ・シレソ	6人
ドファラ・ファラド	5人
ドミラ・ラドミ	2人
ドレミ	3人
ミファソ	2人
シドレ・ドファシ・レミソ レミラ・ミファド・ファラシ ソラレ・ソドレ・ラドレ	各1人

表2. 子どもたちが選んだお気に入りの和音

さらに、自分たちで和音をつける活動を行った後で、「作曲したフォスターはどんな和音を使ったのだろう。」となげかけた。今まで何度もフォスターの和音でこの曲を歌ったり聴いたりしているはずなのだが、視点を与えることにより集中して聴くことができたと考えられる。この題材で和音に対する抵抗感が随分なくなり、興味が高まったと思われる。

また、題材を通してグループで活動する場面を時折入れたが、「ぼくわからんのやけど、どうやったらいい?」と友だちに尋ねる姿や、「そうかもしれないけど、こっちの方が合ってると思わない?」など、協力して課題に取り組む姿が見られた。特に、『静かにねむれ』の旋律に和音をつける場面では、1人が旋律を、もう1人が和音を旋律に合わせて演奏し、残りのメンバー

で合っているかどうかを判断するというようにグループで役割を決めていたり、1人が両手で演奏し、残りのメンバーで話し合っていたりとグループで旋律に合うように決めていた。

今回は、自分の合わせた和音が合っているかどうかきちんとした正解がないために1人で挑戦するのが難しい課題となった。高次の課題にすることでグループで協同的に学ぶ姿が見られたのだと感じている。協同的に学ぶ中で、グループのそれぞれのレディネスの差が活かされ、和音に対してたくさん知識のある子どもはほとんど知識のない子どもに演奏の仕方などを教えたり、逆にほとんど知識のない子どもはたくさん知識がある子どもの固定観念を打ち破るような和音で演奏していたりと、お互いがお互いのよさをうまく使って学びの質を高めていたと考える。

## 5. 成果と課題

和音を作ることにより、それぞれの和音は響きが違うことを子どもたちが感じ取ることができた。実際に鍵盤を使って音を重ねることで自分の好きな響きを見つけたり、どのようにすれば3つの音がきれいに響くのかを考えたりするようになっていった。以前行った音楽アンケートで「両手でピアノなどを演奏することができると好きではない。」と答えた子どもが5人いた。その子どもたちの感想を読むと「和音を作ってみたらすごく楽しかった。」「『静かにねむれ』に合うように和音をつけるのは難しかったけど、今まで知らなかった和音を演奏できてよかった。」など前向きな感想を書いている子どもが多かった。また、旋律に合わせることで、響きの変化の違いに気付くことができる子どもも出てきた。また、書く活動を取り入れることで、楽譜の理解が深まった。自然と楽譜を読み、楽譜通りに演奏することができていた。この題材を通して、1人だと難しかったかもしれないが、グループで考えることで「こんな風に演奏したい・作りたい」という思いや意図をもつことができるようになったと考えている。

また、「比べる」ということも子どもたちの中に浸透してきている。例えば、『静かにねむれ』は誰かのことを思い出して懐かしく思っていて穏やかに歌うけど、『トレロカモミロ』は、はねるみたいに元気よく歌わな雰囲気でない。恥ずかしがってたらあかん。」と言うように、歌い方の工夫に結びついたり、「指揮者によって全然演奏の仕方違うなあ。同じ曲でも速さも違うし、盛り上がり方も違うね。でも、生の演奏はDVDと違ってすごい迫力やった。」など、聴き方にも変化が表れたりしている。

しかし、課題はたくさんある。この題材では、どんな『静かにねむれ』を表現したいかをグループで考えた。今も、どういうものを作りたいのかイメージをもつことが大切だという考えに変わりはない。ただし、

今回は授業時間数と課題の難しさから4小節の表現のみにした。しかし、16小節あるうちの4小節ではせっかくグループで考えたイメージが活かされる場面が少なかった。途中で音色を変えたかったグループや途中から明るいイメージにしたかったグループなどの思いや意図を表現することができなかった。また、発表する側が思いや意図を言えても、聴いている子どもが具体的な言葉で演奏のよかったところや改善点を話すことができなかった。これも4小節の表現だけでは分かりづらいところがあったからだろう。最後まで和音を付け、聴き比べることができていたならば、それぞれのグループのイメージが聴いている子どもたちにも伝わりやすかったのではないかと考える。

また、グループでの学びをもう少し有効に活用し、全体の場での発表だけで終わるのではなく、グループ同士で発表し、聴き合い、高め合う時間を設けてもよかったと考える。2つのグループが近くで表現を見合うことで、「どうしてその和音にしたの?」「2つめの和音がいいね。」など、ざっくばらんに話し合いができたかもしれない。やはり、今回のような1つの正解がないものに対して子どもたちもどう反応したらいいのか悩むからである。しかし、正解が1つではないために、グループで考え、よりよい方向へ判断して決めていこうとすることが学びの質の高まりにつながっていくと考える。課題に向かう姿勢が、いつのまにかドミソやドファラの音符を読み、鍵盤楽器で演奏することが当たり前のようにになっているということにつながっていくのである。

最後に、子どもたちが「いろいろな知識・技能を身に付けたい。」とか「もっと音楽したい。」という気持ちになるために必要なことは達成感ではないかと考える。子どもたちは「こんなことがわかってよかった。できるようになってよかった。」というところで満足して終わるのではなく、「学んだことを活かして伝えたい。相手を感動させたい。」という気持ちを強くもっているものではないかと感じている。子どもたちの表現が受け入れられ、拍手をもらうことが子どもたちに達成感を与え、「音楽って楽しい。」という気持ちを大きくするのだと考える。

## 参考文献

和歌山大学教育学部附属小学校紀要

第32集 2008年3月

佐藤学、教師たちの挑戦—授業を創る、学びが変わる  
秋田喜代美、子どもをはぐくむ授業づくり—知の創造へ  
村上芳雄、主体的学習実践のための学習方法訓練細案  
紙谷一衛、人を魅了する演奏  
茂木健一郎・江村哲二、音楽を「考える」